



教科書を「読まない」子どもたち

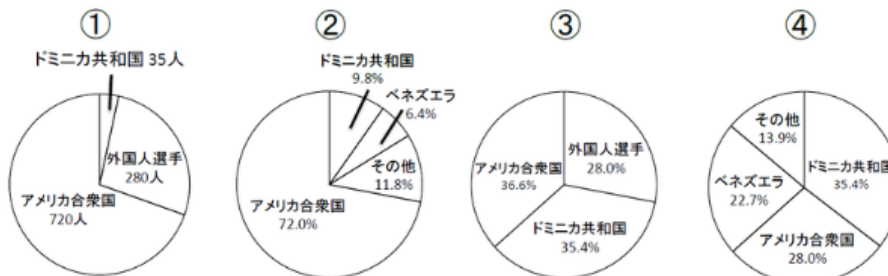
次の問題は、「AI vs. 教科書が読めない子どもたち」の著者で、AIが東京大学に合格できるかを研究した「東ロボくん」プロジェクトで知られる、国立情報学研究所教授で数学者の新井紀子氏が全国の中学生・高校生4万人に行った「リーディング・スキル・テスト」の一部です。

(1) 「Alex は男性にも女性にも使われる名前で、女性の名 Alexandra の愛称であるが、男性の名 Alexander の愛称でもある。」

この文脈において、以下の文中の空欄にあてはまる最も適当なものを選択肢のうちから1つ選びなさい。

Alexandra の愛称は()である。 1.Alex 2.Alexander 3.男性 4.女性

(2) メジャーリーグの選手のうち28%はアメリカ合衆国以外の出身の選手であるが、その出身国を見ると、ドミニカ共和国が最も多くおよそ35%である。



正解率は、上の問題が中学生 37.9%・高校生 64.8%、下の問題が中学生 12.3%・高校生 27.8%という結果となりました。そして、このテストと難関高校・大学への進学率に高い相関関係があったようです。新井氏はこの結果について『…のうち』『…の時』『…以外』という機能語を正確に読めていないため、「基本の読みや論理的推論ができない子にいくら知識を教えても、整合的に使えるようにならない」と分析しています。そして、昨今の子どもたちに決定的に足りないのが、「教科書がきちんと読めていない」ことだと断言しています。

つまり、新たな知識やスキルを学ぶ上で「教科書を読みこむ」という行為が、勉強の質を高め、ひいては国語力を高めることに直結するのです。

昨今では、教科書を読まなくてもお手軽に単元のポイントを教えてくれる、動画授業やタブレットを用いたアプリ教材などのツールが広く普及しはじめています。これらのツールは上手に使いこなせば効率よく知識を得ることができるメリットがあり、今後ますます浸透していくことでしょう。しかしその反面、自分で読解をしなくなるため、表面的に理解したつもりになるだけで、国語力の低下に拍車をかける可能性もあります。

この現状は、残念ながら LAB07 でも少なからず見られます。その学年の子が読んで理解できるように書かれてあるはずの教科書やテキストの解説を読み取れないのでは、どれだけ丁寧に解説しても、どれだけ勉強時間を確保しても、学習効果は望むべくもありません。高校入試コース・小学生クラス・個別などすべての授業では、「教科書やテキストの解説を読み込んで、自分の言葉で説明・要約させる」指導を積極的に行っていますが、今だからこそ「教科書」という、子どもたちにとって最も身近な勉強ツールを確実に活用すべきではないかと考えています。

出典：江川紹子「大事なのは『読む』力だ！～4万人の読解力テストで判明した問題を新井紀子・国立情報学研究所教授に聞く～」